

# 破壊と創造 (五)

八木敏雄

You make your own Fate. There is such a thing as compelling Fortune, however reluctant or averse.  
Edgar A. Poe, *Letters*.

What destroyed him is potentially destructive of us.

Allen Tate, *Our Cousin, Mr. Poe*.

## エドガー・ポオの生活

### ——書簡集を中心に——

エドガー・アラン・ポオの生涯は多くの伝記作者の好餌とされてきた。あきらかに悪意をもって書かれ、歪曲されたポオ像と不正確な伝記的事実の流布に大いに功献したグリズウォルドの『回顧録<sup>メモリアル</sup>』、それに準拠しながら、ときには「鼻疽の引倒し」といった程度にまでシンパセチックなポオドレールの『ポオ——その生涯と作品』、ポオを完全な精神分析学的ケースと見立てたマリー・ボナパルトの『エドガー・ポオ——精神分析学的解釈』、ハーヴィー・アレンなどのロマンチック

クな伝記物語<sup>①</sup>、いまではポオ伝記の定本とされているA・H・クイン教授の実証的、学問的、しかも同情的な評伝<sup>②</sup>など、まことに多種多様である。

しかし、それらの作者のひそみにならって一種の伝記を書こうというのが私の意図ではない。もしそう言ってよければ、「ポオにおける人間の研究」といったものをこころみてみたいだけである。そういうつもりなら、幸い、手もとに引きよせてひもとくことのできる第一級の資料たる二巻よりなる書簡集<sup>③</sup>がある。それに作品集がある。が、ここでは私は書簡集を中心にそれをこころみてみたい。

書簡集を読む場合、しかしながら、伝記的記述をまったく省略するわけにはいかない。それで、照合の便に供するためにも、クインが彫琢した正確な等身大のポオ像の、いわばクロッキーといったものをまずこころみてからさきへすすみたい。

ポオは一八〇九年一月十九日、旅役者を父母にボストンで生れた。まもなく父デイヴィッド・ポオは行方知れずになる。ポオ二歳、母エリザベス・アーノルド・ポオ死ぬ。ポオ孤児となる。リッチモンドのタバコ輸出商人ジョン・アラン家にも引き取られる。一八一五年から二十年まで、アラン夫妻とともに滞英。ポオ十七歳、一八二六年、シャーロットヴィル在のヴァージニア大学に入学。同年十二月、賭博に手を出して多額の借金をこしらえて、ジョン・アランの忌諱に触れ、リッチモンドに引き戻される。帰宅してみると、ひそかに婚約していたセアラ・エルマイラ・ロイスターはほかの男と結婚することになっていて、このロマンスもすでに終ったことを知る。翌一八二七年三月、アラン家を出奔し、ボストンへ向う。同年五月、合衆国陸軍に志願兵として入隊。同じ頃、処女詩集『タマレーン、その他』を私家出版。一八二九年四月、除隊。同年十二月、第二詩集『アル・アーラーフ、タマレーン、ほか小詩数篇』をボルチモアで出版。一八三〇年七月、ウエスト・ポイント陸軍士官学校に入学。一八三二年二月、故意に軍務課業を怠り放校処分を受く。同年四月、第三詩集『ポオ詩集』をニューヨークの一出版社から出す。この

年から短篇小説を書きはじめる。一八三三年、ボルチモア・サタデー・ヴィジター誌の懸賞に応じて『壇の中から出た手紙』で当選。選者の一人ジョン・P・ケネディの知遇を得る。一八三五年八月、リッチモンドの雑誌サザン・リテラリ・メセンジャーの編集者になる。一八三六年、ポオ二十七歳、父方のいとこの十三歳になるヴァージニア・クレムと結婚。一八三八年一月、メセンジャー誌を辞す。同年九月、文学活動の中心地フィラデルフィアに移り住む。同年七月、シエントルマンズ・マガジーン誌の編集者になる。一八四〇年六月、シエントルマンズ誌をやめる。同月、ポオ自身の主宰する雑誌ペン・マガジーンを発刊予告を出す。しかし、出ずじまいになる。一八四一年、グレイアムズ・マガジーン誌の主筆。一八四二年一月、妻ヴァージニア略血。同年五月、グレイアムズ誌を去る。一八四三年一月、自伝、肖像とともに自分の雑誌スタイラスの発刊予告をサタデー・ミューゼム誌に掲載。この雑誌も出ずじまいになる。一八四五年一月、詩『大鴉』をニューヨーク・イヴニング・ミラー紙に発表。二月、週刊誌ブロードウェイ・ジャーナルの編集陣に加わる。七月、同誌主筆。十月、同誌の所有者兼主筆になる。十一月、第四詩集『大鴉その他』を出版。一八四六年一月、ブロードウェイ・ジャーナル廃刊。一八四七年一月、ヴァージニア逝く。一八四八年一月、自分の雑誌スタイラスの新しい発刊予告を印刷。同年六月、『ユリイカ』出版。九月、四十五歳になる未亡人セアラ・ヘレン・ホイットマン夫人に求

婚、婚約する。結婚の日取りまで決っていたが、ついに式は行われなかった。一八四九年六月、雑誌発刊の計画をすすめるためにニューヨークをあとにリッチモンドに向う。同市滞在中、少年時代の恋人で、いまは未亡人のエルマイラ・ロイスター・シェルトンに再会して婚約。九月、リッチモンドを去る。十月三日、ボルチモアの路上で意識を失って倒れているところを発見される。四日後の十月七日早朝、息をひきとる。享年四十歳。

右のポオの略歴を私はクロッキーと断っておいた。粗描する者が誰でもしなくてはならない省略を敢てすることを断つたばかりではなく、なるべくそつげなく書くことをも断るつもりだった。この作家をことさらに「不運の星の下に生れた詩人」と見ることを私は好まないからだ。が、好むと好まざるところにかかわらず、事実をまげるのでない彼の生涯の略画をこころみれば、それは多少とも「数奇な生涯を持った人物の像」になってしまうのかもしれない。なるほど彼の生涯は不幸と不運の連続だったと見られなくはない。ポオドレールはその『エドガー・ポオ——その生涯と作品』の冒頭に、「先頃ひとりの不幸な男が法廷に引きだされたが、その額にはめずらしく風変わりな入墨でかざられていた、つきなし」と書き、「文学史のなかには、これに似た運命の人々、真の呪いを受けた人々があり、——その額のまがりくねったひだのなかに不思議な字体で書かれた悪運の字をもちこんでいる連中

がいる」とつづけている。断るまでもなく、「真の呪いを受け」、額に「悪運」の文字を刻んだ人物とはポオのことだが、これはやはりポオドレールの脚色になる神話劇に登場するポオの姿であるにすぎなからう。しかし、ひとりの人間の人生をまったく「悪運」の宰領下において眺めるのはまぢがつている。よく言つて、ロマンチックにすぎるのであり、悪く言えば、そこには、そういうふうな眺める人間自身の自己欺瞞がすけて見え、人間侮蔑の精神がのぞき、悪の臭いさえする。

これは眺める側の問題だが、眺める側のそういう悪からポオが免れていたということでもない。むしろ、ポオがそういう眺める側の悪のすべてを持っていたところに問題がある。が、ともあれ、いまポオの生涯を眺めようとするわれわれは、そのような自己欺瞞めいた悪から完全に免れていなくてはならない。そのためにはポオドレールの観点を逆転させる必要がある。つまり、ポオの数奇な運命と彼自身とのあいだに共謀関係があったのではなからうか、と疑ぐつてみることにしよう。嫌疑を抱きながら、彼の伝記の資料や書簡集を読んでいると、ますますその嫌疑は深まってくる。だが、それが度外ずれて猜疑深く、意地悪い見方というわけのものではない。こころみに、それを人間一般のこととして考えてみればよい。人間誰しも自己の運命に加担しつつ生きていくことに気がつかないわけにはいくまい。死んでしまった人間の人生が、多かれ少なかれ、宿命的と見えてくるのはそのせいである。「自分

の一生は自分にふさわしくなかった」と言明する人がいたとすれば、われわれはきつとそこに負け惜みを嗅ぎつけることだろう。また自業自得という言葉がある。その人にふさわしくない人生などというものは無い、ということでもあろう。なら、人は自業自得な人生しか持ちえないということでもある。そうならまた、ポオも自業自得な生涯を持ったのである。「運命との共謀」とは如上のようなからくりのことを言ったのである。

運命との共謀——ポオにおけるその関係をつまびらかにすることが拙論の主たるもくろみである。しかし共謀関係というかぎり、そこに自覚と意志が存在しなければならぬ。彼には運命と共謀しつつあるというかなり明確な自覚と、運命の総和が形成するところの宿命への加担の意志があったと思ふ。ここにポオのこんな文章があるが、それはそう読める。ある友人への手紙の一節である。

あなたの輝かしいもくろみは実現されるにちがいない、ま  
せ、なげなげなら、あなたをしてあなた自身たらしめるのは  
「運命 (Fate)」ではないからです。あなたがあなた自身  
の「運命」をつくるのです。どんなに気がすまなくとも、  
どんなにいとわしくとも、従わざるをえないような

「宿命 (Fortune)」というものがありません。

(傍点イタリックス、括弧大文字)

引用の最後の二つのセンテンスのあいだには「しかしながら」というような言葉がほしいところかもしれないが、それは無い。わざわざそんなことを言うのは、一方が積極的な生き方を述べているとすれば、他方は受動的な生き方を述べているように読まれるだろうからだ。だが、この手紙の筆者はいつこうに矛盾を感じているふうではない。「しかしながら」がないのはその証拠だが、われわれもまた右の二文を矛盾なく読むためには、「Fate」と「Fortune」の二語の意味を区別して読む必要がある。私は仮りにその二つを「運命」と「宿命」と訳しておいたが、「運命」とは人間が選んだり、招いたり、承認したり、否認したりすることのできる人生の過程における事件や状態のこと、**「宿命」とは、それらを選び、招き、承認し、否認するにあたっての、どうしようもなくその人のものであるところの選び方、招き方、承認乃至は否認の仕方、あるいはそういう方向に向う詮ない傾向のことであるとして解することにする。**すると、ポオの運命は彼が選び、招き、すくなくとも承認した運命であって、ただ宿命に受動的に耐えた結果ではないと読める。

右のポオの隻句をとらえて私のこれからの論拠のすべてにしようというのではないが、ただ彼が「自分の運命は自分がつくるもの」という自覚を抱いていた人間であることの**一つ証拠**としたいと思うのである。ところで「どうしようもなくその人のものであるところの」宿命、一人の人間の内的原理は、そう単純にできてはならず、時には生命原則を逸脱し、

しばしば世間の幸福の道理に違反する。人はすすんで、あるいは心ならずも、「不運」を招いたり、破滅を選んだりすることがある。それはむしろ今日では周知のことである。その辺の事情についてポオが明確に知っていたであらうことは、彼が『天邪鬼』に代表される一連の不条理な行動に敢て出る人物が主役の短篇小説の作者であったことからもうかがえる。『天邪鬼』でポオはこう書く——「人間行為の内在的原始的原理として、逆説的なるもの」：「われわれはそうしてはならないからこそ、そうするのだ」という「天邪鬼」の精神を世間が認めたがらないのは、「いっさいをあらかじめ定められた人間の運命ということから割り出し、創造神の目的という基礎の上に築き上げた」からである、と。いまのわれわれにはこのような解説はいささか旧聞に属すの感を与えるかもしれないが、それというのも、ポオが、おそらく最初に、そのようなことを明晰に分析してみせてくれ、今日では常識となるほど普及したからである。ところで、「そうしてはならないからこそ、そうする」ことも、またまがいもなく意志の行為である。それは、たとえば、予測される「不運」のゆえにそうすることであり、ここには運命との共謀、宿命と意志との合致が見られるのである。

ところで厄介なことに、ポオは右に述べたような運命や宿命と彼自身との共謀関係についてかなりはつきり自覚しているながら、それをみずからに対して隠そうとつとめた人物であった。こういうからくりについてはのちほどくわしく見るつ

もりだが、ここに彼の最大の弱さ、自己欺瞞があったことは言うまでもない。自己欺瞞とはみずからに対してみずからをくらまそうとする精神の働きのことであるが、人間とはみずからをくらまそうすることによって他人をもくらまそう存在である。後世の人たちにポオが謎めいた人物に見え、その伝記的事実が久しく誤り伝えられてきたのも故なしとしない。もし死後のことをも運命と呼べるのなら、ポオは自己の死後の運命にも大いに加担したのだった。

死んでしまった人間の人生を逆にたどって眺めかえすことのできるのには生きている人間の特権であるので、その特権を活用することにするが、まず、いわゆるポオ神話創造の大立者ルーファス・W・グリズウォルドに死後の作品出版の全権利を依頼したのはポオ自身だったことに注意してみたい。ところで、彼はポオの死後二日目のニューヨーク・トリビューン紙に次のような文を草した人物であった。

エドガー・アラン・ポオは死んだ。彼はボルチモアで一昨日死んだ。この知らせは多くの人々を驚かすであろうが、悲しむ者はほとんどあるまい。この詩人は、個人的にか、評判によつてかで、国中に知られている。彼は英国や他のヨーロッパ諸国にも読者を持っている。しかし彼はほとんど、あるいはまったく友人を持っていなかった。彼の死を悼む気持は、主として、彼の死とともに文学界が、まことに明るいがしかり移り気な遊星の一つを失ったという

思いからくるのでありましょう<sup>⑧</sup>。

こう書いてから、グリズウォールドはポオの経歴を綴っているのだが、その伝記的事実のまらがいにはポオ自身が提供した資料のまらがいも踏襲しているのだから許せるが、「ぼろぼろのフロックコートは下着の不在をかくし、靴の穴は靴下の欠如以上のものを見せていた<sup>⑨</sup>」とはポオの困窮につけ入った言い方であり、ブルワールの小説『キャックストン』を引用してポオの性格描写をしたことなどは卑劣きわまる、とクイン教授は言う。ブルワールからの引用とは次のようなもの。

彼における情熱は、人間の幸福に害をなす最悪の感情の数多くを含有していた。彼と議論しようものなら、きつと腹を立てずにはおれなくなるでしょう。裕福な人のことを口にしようものなら、彼の頬は嫉妬にさいなまれて青ざめるでしょう。この不惑な男の特筆すべき生れつきの美質——その美貌、その敏活さ、彼のまわりに火のような雰囲気をもしました大胆不敵な精神——は彼の生来の自負心を傲慢にまで高め、それがため、彼が賞賛されてしかるべき理由のことごとくを彼に対する偏見のたねと化していた。怒りっぽく、嫉妬深い——相当なものだが、なお最低というわけでもない。なぜなら、そういう顕著な資質は人を寄せつけないような冷笑的態度にすっぽり蔽われてしまっていて、彼の情熱はもっぱら冷笑にはけ口を見出していたから

である。彼には道徳的感受性というものがまるでないようにみえた。そして、この傲慢な資質においてもっとも驚くべきことは、真の名誉心というものが、まずまったくないようにみえることである。彼は俗世間で野心と呼んでいる出世欲を病的なまで極端に抱いていたが、彼の同輩の尊敬や愛を得ようという気持はぜんぜんなかった。彼の自負心を傷つけた世間を侮辱する権利を獲得せんがために、人にすぐれようというのでなく、人に牽仕しようというのでなく——ただひたすらに成功したいという強い願望を胸に秘めていた<sup>⑩</sup>。

驚くべきことに、トリビューン紙上では右の文章は引用符号のなかにおさまっていたのに、後日グリズウォールドが編んだポオ著作集に附された『回顧録』に繰り入れられたときには引用符号は払われているのである。出所がかような人物描写の信憑性については議論の要はほとんどあるまい。しかしそれがグリズウォールド自身の意見として広く引用されていて、それが単なる引用であることが認識されていた場合よりはずっと大きな害毒を流しているのである<sup>⑪</sup>」とは、右の事実を指摘したクインの言葉である。グリズウォールドがポオの手紙に悪意ある改竄を施して著作集に載せた事実を暴露したのもクインで、それは今日ではクインの大きな業績として認められているが、それを暴露した彼の伝記が世に出たのは一九四一年であるから、グリズウォールドの悪業の数々はほとんど

ど一世紀のあいだ埋もれていたわけである。

グリズウォルドの悪宣伝が英・米・仏などにおいてどれほど深甚な悪影響を及ぼしたかについてはクインに詳しいが、その影響範囲の広大さは、わが斎藤勇教授の『アメリカ文学史』（初版一九四一年、第三版一九四六年に依る）のポオの項を参観してみてもわかる。目についての文字を抜き書きしてみる。「Edgar Allan Poe の一生は悲惨を以て終始している」「路頭に迷うほかなかった孤児はジョン・アランというタバコ輸出商の養子として……引きとられた」「それまで多過ぎるほどの小遣金をやっていた養父は彼を退学させ……」「養父は彼を探し出して、陸軍士官学校に入学させた」「身体の發育の不完全な点から見ても、inferiority complexを感じていたのであろうか、ややもすれば踏晦するかの如く人の群を離れ、……」「Virginia Clemm という年齒も行かぬ小娘と結婚し……」「そのうちに……妻は死んだ。それよりも前既に彼は Mrs. F. S. Osgood という凡庸詩人との関係について浮名を流したこともあるが、その後は他の二婦人と恋愛沙汰もあった」「それ（『ユリイカ』）は宇宙の創造に関するひやかし半分の論文である」「晩年の知人は彼を傲慢で怒り易く且怠惰であったと罵るけれども、おとなしく、やさしい性質だったと賞める者もある。前述の劣等感から却って馬鹿にふんとして見えているように見えたり、又は衝動に駆られたりしたのであろう」等々。伝記的事実のまらがい（アランがポオに「多過ぎるほどの小遣金をやっていた」ということは

ない。また、アランが彼を探し出してウエスト・ポイントに入れたという事実もなく、「身体の發育不完全な」若者が合衆国陸軍に入隊し、二年足らずで特務曹長にまで昇進し、陸軍士官学校に入学を許可されるということもありそうにない）は執筆当時の事情からは仕方がないことであろう。それにしても、謹厳な教授らしくもない言葉の端々に、間接的にせよ直接的にせよ、グリズウォルドの影響が見てとれる。しかもそれが『キヤックストン』の一節の影響だとすれば、事態は喜劇的ですからある。

これがしばらく前のわが国のアカデミックな世界での事態だったとすれば、非アカデミックな世界ではどうだったであろうか。わが文学界の大御所批評家小林秀雄の最初の著作はポオドレールの『エドガー・ポオ』の翻訳（大正十五年・新しき村出版部刊）なのである。そして小林秀雄は彼のもっとも初期の批評文の一つ『志賀直哉』論の八分の一ほどをこともあろうに、ポオについて費している。「エドガー・ポオ——この比類のない一人物は、少くとも日本の現文壇からは、嘗て一奇術師の御座興を楽しまただけで、既に役を畢った一奇譚作者として、姿を消してしまつた。私は今、彼の不運を嘆くほど道草は食うまいが、私には、彼の脳髓を心に浮べる事なく、論理とその映像の問題、つまり批評というものを考える事が出来ないのだ。

彼の遊星の軌道の様な詩体や、極限をさまよう心理風景の諸魔術は、今も尚、セザル・フランクの変調の様に私を捕え

る<sup>⑧</sup>」などと小林は書いている。今ではいさか大時代的な感じのする文章だが、ここにあらわなのはポオドレールの文章の反映である。「遊星の軌道の様な詩体」という小林の言葉が、ポオのどの詩のことを言っているのか私にはとんと見当がつかないが、ポオドレールの次のような文章からヒントを得た思いつきの言葉と解するのなら納得がいく。「彼(アメリカ人)は諸君にポオは移り気で異常な人間で、いわば軌道はずれた遊星であり(un être erratique et hétéroclite, une planète déorbitée)<sup>⑨</sup>」とポオドレールは書いた。ところでグリズウォールドは前掲の一文でこう書いたのだった。

“...in him literary art has lost one of its most brilliant but erratic stars.” もっとも、ポオドレールはグリズウォールドの悪党たることを前掲の鋭い臭覚でかぎつけていて、「この偽善的吸血鬼は、死後に出版された作品集のまさに冒頭に掲げられた平板にして悪意にみちた長大な論文のなかで、亡友をながながと誹謗したのである。——いったいアメリカには犬どもに墓場に立ち入ることを禁ずる法律が存在しないのであるのか?」と書いている。まさしく犬は墓場を荒したのだった。そしてポオドレールはポオの墓場を奇妙な具合に飾ったのである。

グリズウォールドの悪党たるゆえんについてはすでに十分述べたが、ポオ自身は彼のことをどう思っていたのだろうか。彼の編集者としての才を特に認めていたというふうも、彼の品性を信じていたというふうもない。むしろ逆である。ポオ

はフレデリック・W・トマス宛の手紙で、グリズウォールドのことを、「彼は自分のことを公正な目<sup>ホネスト</sup> (honest judge) だと売りこんでいるいい気な男 (pretty fellow) だ<sup>⑩</sup>」と言い、次のような挿話を書き送っている。ある日、ポオがグリズウォールドに彼の本 (Poets and Poetry of America) の書評をする意向のあることを洩すと、どこかいい発表先をみつめてやると約束し、そのうえ原稿料まで前金で支払ったというのである。次は手紙に見えるポオ自身の註釈——「これは、いいかね、自分の本を宣伝してくれといふかなり巧妙な買収のさそいだ。ぼくはすぐさまその申し出を受け入れ、書評を書き、彼に手渡し、代金を受け取った。その書評はまだ出ていないが、結局日の目を見ないのではないかと思つていゝ。ぼくはそれをまさしくいつもと変らぬ調子で書いたのだ。いいかい、讃辞で埋つてはいなかったというわけさ<sup>⑪</sup>」これはポオがグリズウォールドの品性を信用していなかったという証拠になるだろう。が、この人物に彼はすすんで自分の死後の一切を託したのである。死後に自分の生涯をくらますには、この人物の助けを借りるのが最適、とポオが思ったからだとも考えなければ、この辺の事情はなかなかわかりにくい。

ポオの死も近づいた一八四九年五月のグリズウォールド宛のある手紙に、彼はこんな奇妙な訂正要求の一文をしたためている——「そんなに重大なことではありませんが——あなたの版 (註・The 10th edition of Poets and Poetry of America)



の一つに、あなたは私の歳としではなく、私の姉の歳としを書いています。私は一八一三年十二月生れです——一八一一年一月というのは姉のです<sup>⑧</sup>と。ポオの正しい生年月日は一八〇九年一月十九日であるから、彼はひどいでたらめを言っているわけである。ところで、グリズウォルドの伝記では、ポオの生れた年は訂正を求められたとおりの一八一三年になっていて、この点、グリズウォルドは律気だったわけだ。その他のまちがい、たとえば、ポオが兵役についたのが士官学校退学以後のことになっていることなども、みな彼がポオの提供した資料を鵜呑みにしたからである。しかしそれらのでたらめは、もしグリズウォルドがすこしでも事実を確認しようとするたぐいの伝記作者であったのなら、すぐそれとわかるたぐいのでたらめばかりであった。むしろそれらのでたらめはグリズウォルドの伝記を書く目的にかなっていたと考えらるべきであろう——そしてそれはポオの秘かな意図にもかなっていた、と。すくなくともグリズウォルドとポオの関係は単純に加害者と被害者との関係ではなさそうである。

ポオがグリズウォルドに提供した伝記的資料や人生観の記述といったものが残っていると好都合なのだが、残念ながらそういうものはない。しかし、ポオがジエムズ・R・ロウエルに「人生の目算」を問われて書いた返書が残っている。グリズウォルドにも書いていたとすれば、どのような調子のものであったかがうかがうにはたる。また、この手紙はポオを知るうえでも重要な文献だと思うので、いささか長くなる

が、肝要な箇所を左に引用してみる。

私はひどく怠惰です。そしてすばらしく勤勉です——時々思い出したように。あらゆる種類の精神活動が苦痛であるような時期があります。バイロンの「祭壇」たる「山や森」との孤独な交わりコミュニケーション以外にはなんの喜びをも私に与えないような時期があります。かくして私は幾月ものあいだはつつき歩き、夢想にふけているのですが、突然めざめて、いわば物を書く病にとりつかれます。すると、その病いがつづくかぎり、私は一日中書き、一晚中読みます。

(中略)

私は野心家ではありません、——ネガティブにしか。私は、ときどき、馬鹿者にすぐれたいという気持に襲われます。馬鹿者に自分のほうが私よりすぐれていると思わせないからだけのことです。私はこれ以上の野心を感じることはありません。私は、人がただ口先だけで言っている、あのむなしさ——人間のかりそめの生のむなしさを肝に銘じて知っています。私は常に未来を夢見て生きています。私は人間の完璧性を信じていません。私は人間の努力が人間性に対して認めうるほどの効果をもたらそうとは思えません。いまの人間は、六千年前の人間より、ただいくらかあくせくしているだけで——より幸福だということも——より賢明だということもありません。今後とも結果に変わりようのあるはずがありません——変わりようがあると考

えることは、これまでの人間が無駄に生きてきたと考えることです——過去は単に未来の胚種にすぎないと考えることです——すでに死んだ無数の人たちがわれわれと同一の基盤に立っていなかったと考えることです。またわれわれがわれわれの子孫と同一の基盤に立っていないと考えることです。私は個人としての人間が大眾としての人間のなかに見失われてしまうという意見に同意できません。私は精神性というものを信じていません。精神性とは単なる言葉にすぎません。誰も精神という概念をほんとうには抱きえません。われわれは存在しないものを想像することはできません。われわれは無限に稀薄化された物質という觀念にたぶらかされているのです。(中略)

貴殿は「私の人生の目算」を、とおっしゃる——ですが、私がすでに語ったことから、私にはお話しするような目算なんてなんにもないことがおわかりでしょう。私はかりそめごとの無常とはかなを (The mutability and evanescence of temporal things) をあまりにも深く知りすぎているので、なにごとにも持続的な努力を払うことができませぬ。なにごとにも終始一貫することができません。私の人生はきまぐれでした——衝動でした——情熱でした——孤独への渴望でした——未来に対する真摯な願いのうちにあつての、現存するすべてのものに対する侮蔑でした<sup>⑩</sup>。

この手紙を受け取ったロウエルは、ポオ存命中に、彼についてのもっとも好意的で妥当な評伝を書いた人だったが、この同じ材料からでも、いささかの悪意と脚色力があれば、グリズウォルドが書いたような文章をものせないことはない。偽悪的な性質を右のポオの告白は備えているからである。彼は自分のことを「ひどく怠惰です」と言い、自分の人生のことは「きまぐれ」「衝動」「情熱」「孤独への渴望」「現存するすべてのものに対する侮蔑」だったと言っているのである。為にしようとしてできない言葉ではない。

が、為にしようというのではないわれわれは右の手紙のポオの言葉をもっと真にうけてよい。そこには彼に特徴的な自己規定の仕方が見られる。彼は自己を「現在」によってではなく「未来」によって、「現存するもの」によってではなく「不在」によって、「此岸」によってではなく「彼岸」によって規定した人物であつたと知れる。『ロングフェロー論』のなかでも、ポオは詩人を規定してこのように言っている。「人間の不滅性を保証する重大な要件の一つに△美Vの感覺がある。……満たされざる欲望がある。……それは眼前の美をめだたいという願ひではない。天上の美への憧れである。それはいまだ存在せざる美に対する予感である。地上の眺めや音色や情緒に満足することを知らぬ情熱である。この渴いた魂は、その熱病を癒さんがために創造へと不毛な努力をくりかえす。墓場の彼方の美に不思議な感興を覚え、△時間Vの制約下にある事物と思考とをあらたに様々に組み合わせ

ることによって、おそらくは人永遠Vにのみ属するところの美のいくぶんたりともを己がものにせんがためにあがくのである。それにふさわしく生れついた者の、かような努力の結果のみが人詩Vの名で呼ばれるに値する」

「地上」と「時間」と「肉体」の桎梏の下にある人間の、「不滅」と「永遠の生命」を希求し、「眼前の美」に満足することを知らず、ひたすらに「彼方」の「美」に憧れ、「時間」の絶対性からさえ己を救出しようという理不尽な「情熱」に発する「不毛な努力」を「詩的創造」とポオは呼び、かような努力をする人種のことを詩人と規定しているわけである。この評論文とさきの手紙文とのあいだに本質的な差異はない。両者とも、「此岸」「時間」「現存」からの脱脚、乃至は超越のことを言っている。そして注意すべきは、手紙でも人事の「無常」と「はかなさ」のことを言い、評論文でも「詩的創造」の努力の「不毛」を言っていることである。ポオは詩を書く行為をなべて地上的なものからの超出のころみと規定し、同時に、かかる超出のころみを成功の見込みのない「不毛な努力」と呼んでいる。結局、詩による超越が絶対に不可能だと確信していながら、詩による超越をころみるより術を知らぬ資性的な芸術家のことをポオは詩人と呼んでいるわけである。これがそのままポオの人間規定、人間認識の仕方に通ずることは言うまでもない。

彼は人間にとって超越が可能だとは信じていなかったのだから、しかし、語るところは超越そのものについてであった。

超越が不可能であるにもかかわらず、あるいは不可能だからこそ、超越をころみてやまぬのが人間だと彼は心得ていたのであろう。そのようなポオにとって、人生はついにむなしい「受難<sup>ガシオン</sup>」でしかなかったことに不思議はない。

このことは、しかしながら、すべての人間にとって超越が不可能だということを意味しない。世のすぐれた宗教家の中には、人間が人間でありながらに、またいながらにして、超越往生を遂げた人もすくなしとしない。地獄と極楽、此岸と彼岸は厳然と距離を保って二元でありながら、神の恩寵、弥陀の本願、信仰の深甚、衆生の念仏などによって結ばれ、一元と化すところにそういう超越の不思議があるのだが、それは不思議なりに事実であることが体験されるわけである。それを体験するためには信心だけではたりず、さまざま工夫や修業が必要なわけで、それはあるいは「捨てる」ことであり、あるいは「任かす」ことであり、あるいは「自然」に親炙することであるのは、東西古今を通じて共通であるようにみえる。ポオの時代の米國にも超越主義者<sup>トランスセンダクリスト</sup>と称せられた一群の人たちがいた。彼らはいちように俗界を捨て、自然に親んだ。それは彼らの超越のための工夫だった。しかしポオにはそのような工夫はなかった。俗界を避け、齋戒沐浴して心身の脱却をはかるといふような工夫とポオは無縁だった。(わずかに純粹想像力による超越のころみがポオにはあったが、純粹想像力のついでに行く末については前章でみた)「現存するすべてのものに対する侮蔑」を述べながら、彼が

生きた場所は主として当時の都市ジャーナリズムの世界であり、バイロンを気取つてもいるが、彼が「山や森」の徘徊に多くの時間を費した気配はさらにない。実も蓋もない言い方になるが、そういう俗界に好んで生活していたポオは、もともと俗界を軽蔑する権利を奪われていたわけでもあり、もし軽蔑した結果が彼の不断の不如意であったのなら、自業自得と言うほかはない。

たしかに自業自得などところがある。彼の貧乏の主たる原因は彼が定職に就くのをいさぎよしとしなかったところにあると思えるからである。

一八三五年、ポオは、ジョン・P・ケネディの推挽もあつて、サザン・リテラリー・メセンジャー誌の編集者の職を得た。生れてはじめて文学上の職務にたずさわることができたわけである。当時、彼は前記ケネディに次のように書き送つている。

「私の健康は過去数年にないほどよく、私の気力は充実しており、金銭上の困難は霧散し、将来の成功に対してもかなりよい見通しを抱いています——つまり万事好調です。(中略) ホワイト氏は応場で、五二〇ドルの俸給のほかに、勤務外の仕事に対しても存分に支払つてくれているので、私はほとんど八〇〇ドルほどもらっています」<sup>⑧</sup>

この手紙から一週間後の一八三六年二月十一日附けの同じケネディ宛の手紙には、「あれからまた、W氏は本年度分の俸給を一〇四ドル上げてくれました——これは予想外の好意で

す。彼はあらゆる点でまことに親切な人です<sup>⑨</sup>」とある。にもかかわらず、一八三七年一月にはメセンジャー誌をやめている。そして、数年後のウィリアム・ポオ宛の手紙では、ホワイト氏は次のような人物になりさがつてゐる。

「お人好だが、小生の仕事を評価する能力も、それに報いる意志もないような無学で卑俗な人物のために小生の至上の能力を費していたにもかかわらず、小生には経済事情を好転させる見込が立たなかつた」と述べ、「仕事は苛酷で、俸給はお話にならなかつた (the salary was contemptible)」<sup>⑩</sup>とまで言う。ホワイトは、ポオも認めているように、「お人好し」乃至は「善意の人」(well-meaning man) だつたと思われる。ポオの死後、グリズウォルドの悪宣伝に対して、弁護の好意あふれる反論を書いたような人物でもある。すると、変つたのはホワイトの方ではなく、ポオの方だつたのだ。一日二時間ほどの編集の仕事がいやになつたにちがいない。が、その職を辞するにあつたつて、ポオに確たる収入の見込みがあつたわけではなかつた。

彼は妻と義母を伴つてリッチモンドを去り、ニューヨークへ向う。そこでの一年半ほどのあいだの彼の家族の主たる収入はクレム夫人の下宿業からの収益だつたと思われる。またフィラデルフィアに移る。『貝類学の手引』(The Conchologist's First Book, 1839) という教科書まで手がけたのはこの地においてである。そしてこの年、つまり一八三九年七月、またジェントルマンズ・マガジン誌に職を得た。週

給一〇ドル。これではメセンジャー誌のほうが分がいいのである。一八四〇年六月、またこの雑誌をやめてしまうのだが、この一年間は彼はよい仕事をしている。有名な『アッシュ館の崩壊』や『ウイリアム・ウィルソン』もこの間に発表され、また短篇集『グロテスクな物語とアラベスクな物語』が世に出た。定収入に援けられて——と言えなくはない。

次の定職に就いたのが一八四一年四月であった。グレイアムズ・マガジンの主筆の職だったが、この職にとどまること一年、一八四二年五月、またこの雑誌から身を引いている。そのひと月ほどまえには妻ヴァージニアが咯血するというようなこともあった時期である。この短いグレイアムズ時代にさえ、彼の友人のフレデリック・トマスがワシントンで政府関係の仕事に就いたと聞くと、トマスに「グレイアムズ氏のためぬ鄭重さや心からの親切にもかかわらず、私は自分の置かれてある立場がいつそういとわしく感じられるようなところですよ。私も君のようにできるといいと思っています」と書き送り、同種の職の斡旋方を熱心な口調で依頼している。この求めに応じてトマスはすぐに返事を書き、ワシントンに出向くように求めた。それに対してポオはこう返事する——「できることならワシントンへ出向きたい——だが、いつものことながら——金がない——帰りの路銭はもうろんのこと、ワシントンへ行くだけの費用もない始末。貧乏はつらいことです——天に恥じない動機によってそんなのだから、

敢て不平は申しませんが」

これでは政府関係の職を本気で求めていたのかどうか、疑われても仕方がない。当時、彼はまだグレイアムズ誌に つとめていて、定収入はあったはずなのである。しかし、いざトマスの得たような年俸一〇〇〇ドルの職がありそうな気配になると、「思索に専心し」「何か価値あることをする」余裕のある仕事かどうか心配になったにちがいない。彼はトマスにワシントン行きを断っておいてから、さっそくこんな註文をつけている——「糊口の資のために文学にたずさわらなくてすむ仕事を得られるのなら——年俸五〇〇ドルの仕事でいい」と。が、ともかく、彼はなら就職のあてもなく、一八四二年の春にはグレイアムズ誌をやめる。「私がやめた理由は」とポオはトマスに書いている。「雑誌の軽薄な性格にいや気がさしてきたからです。(中略) グレイアム氏は、まことに弱い性格の人ですが、まことに真からの紳士で、彼のあいだに誤解はありませんでした」。やめれば困窮することが目に見えていたとすれば、これはまことに薄弱な辞任の弁である。

グレイアムズ誌を辞してからひと月目の六月には、ポオはある友人にこんな手紙を書いているほどであるから、ただちに困窮しはじめたことは明白だ。

「私の唯一の望みは、△破産宣告▽を受けることです。(中略) もっと早くこの決心がついておれば、いまごろはうまくいっているはずなのです——ところが、なんとかやっついてい

うと奮闘してきたばかりに、とうとう完全に破滅してしまいました。宣告を受けるための費用さえなくなってしまったというわけです」

しかし、ポオはこれにつづけて、希望を洩らしてもいる。

「当地の税関の職につける約束ができていることをお聞きになれば、あなたも安心なさるでしょう。(中略) もし私がほんとうに任命されれば、万事好調にいくはずで、役所の仕事はまったく楽なもので、他の仕事にさくことのできる余暇は充分にあるはずで、口外は無用です——というのは、決局、目算外れになるかもしれないからです。

家内は肺からの出血で重態です。望みはありません。」

しかし、一八四二年十一月、この税関の話も不首尾に終わったことをポオは知る。一八四三年三月には、友人たちのすすめと推薦を得て、政府関係の職を得べくワシントンにおもむく。が、彼は酒気を帯びて面接者の前に出頭したという。かくして彼はみずから就職の機会をつぶしたのである。ポオ

が決して酒に強いたちではなく、(トマスは右の事情を伝え、たポオからの手紙の裏に次のように註している——「彼(ポオ)はワシントンに出頭してきたが、まさしく自分の利益を増進せしめるような仕方を出頭したのではなかった。私はポオのことをよく知っているが、彼をして人酔態Vにおもむかせるものは、とくに顕著な酒癖のせいというよりは、むしろ彼の過敏な、並外れた感受性のせいだった。彼は一杯の弱いワインかビールかリンゴ酒を飲んだだけで酒杯のルビコン川

を渡ってしまい、たいがい飲みすぎになり、気持が悪くなってしまうのだった。しかし彼はこの性癖に対して、コールリッジがそうであったように、けなげに戦った⑧)、また、彼自身も言い、他人の証言もあるように、克己心によって酒に近づかなかった時期もいくどかあった。ポオは「好機」を選んで自分の「弱さ」をひけらかしたとしか考えられない——むろん貧乏をつづけるために。

一八四四年四月、彼はフィラデルフィアを去ってニューヨークに行き、数カ月後にイーヴニング・ミラーズ紙に職を得、一八四五年二月にはブロードウェー・ジャーナルの編集陣に加わり、七月には主筆になり、十月にはこの雑誌の所有者になった。自分の雑誌を持ちたいという彼の希望はかなえられたかに見える。が、一八四六年一月、この雑誌は廃刊になっていく。資金不足、そのうえ彼が「意気沮喪⑨」していったことが原因だった。この時期に「意気沮喪」してしまうことを単なる彼の不幸と片付けてしまうわけにはいかないのである。

彼の貧乏と彼の意志とのあいだにはひそかな共謀関係がたしかにあった。だが彼はそのひそかな意志の働きをみずからに隠すたぐいの人間だった。一方では、清貧に甘んじ、それによって超俗をこころみているようなことを口にしながら、他方では、自分の貧困が自分に値いしないこと、それが他人のせい、社会のせいであることをしばしば言明している。

(この項未完)

- ① *The Works of Late Edgar Allan Poe. With a Memoir by Rufus W. Griswold and Notices of his Life and Genius by N. P. Willis and J. R. Lowell*, 4 vols (New York, 1850-1856).
- ② Baudelaire, "Edgar Poe, sa vie et ses œuvres", preface to *Histoires Extraordinaires par Edgar Poe*.
- ③ Marie Bonaparte, *Edgar Allan Poe — A Psycho-analytic Interpretation* (London, 1948).
- ④ Hervey Allen, *Israel—The Life and Times of Edgar Allan Poe* (London, 1927).
- ⑤ Arthur Hobson Quinn, *Edgar Allan Poe — A Critical Biography* (New York, 1941). Hereafter referred to as Quinn, *Poe*.
- ⑥ *The Letters of Edgar Allan Poe*, ed. John Ostrom (Cambridge, Mass., 1948, 2 vols). Hereafter referred to as *Letters*.
- ⑦ “エドガー・ポオ，その生涯と作品”，ポオドレーブル全集Ⅲ，(人文書院，1963)，p. 3.
- ⑧ To James Herron, June 30, 1842, *Letters*, I, 138.
- ⑨ See Quinn, *Poe*, p. 646.
- ⑩ *Ibid.*
- ⑪ *Ibid.*, p. 647.
- ⑫ *Ibid.*
- ⑬ 小林秀雄全集 I (新潮社，1955)，p. 117.
- ⑭ “エドガー・ポオ，その生涯と作品” *op. cit.* p. 5.
- ⑮ *Ibid.*
- ⑯ To Frederic W. Thomas, September 12, 1842, *Letters*, I, 143.
- ⑰ *Ibid.*
- ⑱ To Rufus W. Griswold, May (?), 1849, *Ibid.* II, 317.
- ⑲ To James R. Lowell, July 2, 1844, *Ibid.* I, 179.
- ⑳ To John P. Kennedy, January 22, 1836, *Ibid.*, I, 54.
- ㉑ *Ibid.*, I, 57.
- ㉒ To William Poe, August 15, 1840, *Ibid.*, I, 97.
- ㉓ To Frederic W. Thomas, June 26, 1841, *Ibid.*, I, 117.
- ㉔ July 4, 1841, *Ibid.*, I, 118.
- ㉕ *Ibid.*
- ㉖ May 25, 1842, *Ibid.*, I, 134.
- ㉗ To James Herron, early June, 1842, *Ibid.*, I, 135.
- ㉘ See the note to *Ibid.*, I, 156.
- ㉙ See *Ibid.*, I, 215.